

## 県内初の施設の始まり

## 父の思い詰まる出発点

鹿児島県老人保健施設協会 理事

今林 正典



「日頃の診察を通じてこの種の施設が不可欠と感じていました。(略)地域の老人福祉に少しでも奉仕できれば、と考えています。(今林整形外科が)昭和51年の開業以来ここまでこられたのも、多くの患者さんの支えがあったればこそ。寝たきりなら座れるよう、座れる人は歩けるようにと一歩ずつ前進させて、なるべく介助なしで生活できるようにするのが使命です」。父である今林正明は新聞記事でこう語っている。

介護老人保健施設は厚生省が昭和63年度に打ち出した制度。鹿児島県内では指宿、大口市の2カ所の創設が認められた。病院と特養の両者の機能を併せ持

ついわば家庭と病院の中間的役割を果たす新しいタイプの福祉施設として指宿温泉菜の花苑は開苑の準備を始めた。

記録によると、昭和63年11月17日、市中央公民館で苑の目的・意義について地域の方を対象に説明会を開催した。雨天にもかかわらず約170人が参加。入所基準に関する質問が多く、その後の問い合わせの多さからも、苑への関心の高さを知ることができる。

施設は総工費4億5千万円。菜の花を連想させる淡い色の壁面にアーチ状の屋根。市役所のはす向かい、目抜き通りにあり、玄関の自動ドアから始まる木目が温かみを感じさせるようにつ

くり。本館の鉄筋4階建て(延べ2270平方メートル)にゆつたりスペースの療養室やラウンジ、診察室、機能訓練室(体を支えて歩行訓練の手助けをする九州初のロボットを備えている)。入所者が寝たまま入浴できる特殊浴槽室、家族宿泊室、地域のお年寄りにも開放する図書・娯楽室もあり、別棟には温泉リハビリハウス(170平方メートル)を完備した。地域の寝たきりの高齢者に開放する家族風呂や薬浴、露天ぶろ、ミストルームがあり、ボランティアとの交流などができる多様なシステムになっている。

スタッフは施設長以下、医師1人が常駐し、看護師6人、介護職員10人、理学療法士など計28人。12月23日に入苑が始まり、入苑者は脳卒中や脊髄損傷などで、介助がなければ食事や入浴、排便などができない方ばかりだ。定数54人の第1陣として16人が入所、スタッフが運営に慣れるまで(年度内)は20人程度に抑え、職員らの習熟度に合わせて徐々に増やそうという方針を立てていたが、オープンして2カ月で42人までに増加。開苑に備えて先発のモデル施設

(小倉・伸寿苑)で研修を積んではいたが、実際やってみるといろいろな問題が生じて試行錯誤の連続となった。

二日も早い高齢者の方々の自立を手助けすると同時に、外部の助言も求め施設運営のオープン化を図っていききたい」と話し、鹿児島初の老人保健施設を開設するなど病院の規模をコツコツと拡張してきた父、今林正明だったが、今年1月14日に生涯を閉じた。享年83歳。持ち前の先見の明、実行力、忍耐力、人を常に深く思う気持ち。パランスの良い気質からたくさんの人々に恵まれた。

新型コロナウイルス感染は広がり、ワクチン接種は思うように進んでいない。介護人材不足も言われる中、介護職員の方々には十分な感染予防対策に尽力いただいている。

「患者さま及びその家族の立場になって考え実践する」という強い信念のもと、地域の方々には選ばれ、頼られるような施設を目指し、入所者の方々にとって最も居心地の良い介護施設となるよう注力していきたい。